■ IICLO MAGAZINE NO.188---------- 2026/4/21
★★★ 大阪国際児童文学振興財団 メールマガジン ★★★

今年の桜は例年よりちょっと長持ち。入学式まで楽しめたようです。現在会員登録数 4,658 人さま。次号は５月 20 日発行の予定です／

◇◆◇　目次　◇◆◇

【１】お知らせ
【２】コラム
《１》この本読んだ？
《２》イーハトヴ周遊　宮沢賢治の童話を読破する
《３》子どもの本の珠玉のことば
《４》行って来ました！
《５》宮川健郎　私の出会った児童文学者たち
《６》富安陽子　腕だめし　ＳＴＯＲＹ ＣＯＭＰＥ．２０２５
【３】全国のイベント紹介
【４】プレゼント

【１】お知らせ

● 「ほんナビきっず」のＵＲＬが変更されました
子どもに本との出会いをナビゲートするサイト「ほんナビきっず」（富士通 Japan(株)運営）のＵＲＬが新しくなりました。リンクをされている方は変更をお願いします。　https://www.honnavi.jp/honnavi/navi/topmenu2.jsp
「ほんナビきっず」は 2006 年に、富士通 Japan、筑波大学 図書館情報メディア研究科と当財団が共同研究して作成し、当財団が現在も新しい本のデータを提供しています。ぜひご活用ください。

● ≪ご寄付をお願いします≫　当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。
※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html
※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。
→ https://syncable.biz/associate/19800701

● YouTube 版「本の海大冒険」　https://www.youtube.com/@iiclo1196
※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● Instagram　随時更新　https://www.instagram.com/iiclo_official/

● Ｘ（旧 Twitter）　毎日更新　https://twitter.com/IICLO_News

【２】コラム

****
《１》この本読んだ？ Yasuko's & Noriko's Talk
****
『ひとりぼっちのクジラとわたしの歌』　リン・ケリー/作　久保陽子/訳　カシワイ/絵　静山社　2026 年 2 月　対象年齢：小学校高学年以上

＊今回のゲストは日中児童文学研究者の浅野法子さん（Ｎ）です。

あらすじ：12 歳のアイリスは、学校で一人だけ耳が聞こえないため、孤独を感じている。理科の授業で、他のクジラとは違う 55 ヘルツの音を出して海を泳ぎ続けているクジラ（ブルー55）がいることを知り、アイリスは 55 ヘルツの音楽を使ってコミュニケーションをとることを考えつき、そのクジラに出会いたいと思う。両親は説得できないが、祖父をなくしてお年寄りが暮らす集合住宅に住む祖母に自分の思いを伝え、二人でアラスカへの旅に出かける。

N：しっかりした構造で読み応えのある作品をおもしろく楽しく読みました。
Y：アイリスが他のクジラとコミュニケーションできないブルー55 と、学校の中で、唯一、母語が手話であるため、他の生徒や先生と言葉が通じない自分を重ね合わせている点が興味深かったです。
N：「ことば」とは何か、「コミュニケーション」とは何かを考えさせる作品でしたね。たとえば、アイリスが「葉は　ゆれ/　ふかれ　まわり/　流れにのり/　岸辺に　たどりつく・・・」という詩を宿題として提出し、手話で表現すると「片手は開いたハンドシェイプでサインがつながっていく」ように工夫しても、先生からは韻を踏んでいないという理由で詩に「大きな赤いバツ印」がつけられます。話している言葉と手話が違うことによるアイリスの孤独がひしひしと感じられました。
　もう一つ、「ことば」で印象に残ったのは、聴者で手話が苦手なお父さんが、比喩やことわざをよく使ってアイリスが混乱する様子でした。手話と英語（日本語）は違う言語なんだということが伝わります。
Y：そんな中で、船旅で友だちになったベニーは、アイリスの目を開いてくれます。ベニーは、アイリスを聴者や聾者という分け方ではなく、一人の人として友だちになります。そして、アイリスが、通っている学校で間違った手話でコミュニケーションをとろうとするニーナの悪口を言ったときには、自分の意見をはっきり伝えます。
N：ベニー自身も海洋生物の研究者である母親とともに船に乗ってホームスクーリングを受けており、ある意味、孤独です。
Y：もう一人、聾者であるおばあちゃんもアイリスを支えます。
N：おじいちゃんがなくなって、お年寄りが暮らす集合住宅に住むおばあちゃんは、アイリスがブルー55 に自分の用意した音楽を聞かせたいと言ったとき、いっしょにアラスカまで行ってくれます。その行動力に驚かされました。
Y：そして、アイリスとおばあちゃんが意気投合したとき、聴者であるお母さんが孤独に感じていることが描かれている点も心に残りました。
N：アイリスがラジオの修理が得意という設定は、ジェンダーの視点からも聴者と音という視点からも興味深く、聴者が聞いている音だけが音じゃないということが伝わると思いました。
Y：原題は「Song for a Whale」。コミュニケーションの原点にある歌が日本語より強調されたタイトルになっているように思いました。

****
《２》イーハトヴ周遊　宮沢賢治の童話を読破する
****
イーハトヴ周遊　宮沢賢治の童話を読破する
第 127 回　「家長制度」
　眼をこらす「私」

「火皿は油煙をふりみだし、炉の向こうにはここの主人が、大黒柱を二きれみじかく切って投げたというふうにどっしりがたりと膝をそろえて座っている。」――こう書き出される「家長制度」は、賢治の最初の散文といわれる「丹藤川」（原稿に「大正五年」と記されています）にだいぶあとになって鉛筆で

手入れをして改題改作したものです。盛岡高等農林学校時代、寄宿舎で同じ部屋だった高橋秀松とともに北上山地を歩いたとき、一晩、大きな農家に泊めてもらった体験がもとになっている、ごく短い小品です。

主人の息子らは、「音なく外の闇から」帰ってきました。

〈もし私が何かちがったことでも云ったら、そのむすこらのどの一人でも、すぐに私をかた手でおもてのくらやみに、連れ出すことはわけなさそうだ。それがだまってねむっている。たぶんねむっているらしい。
　火皿が黒い油煙を揚げるその下で、一人の女が何かしきりにこしらえている。（中略）どうも私の食事の仕度をしているらしい。それならさっきもことわったのだ。〉

膝をそろえて座っている主人に相対して、ずいぶん居心地の悪い緊張感のなかにいる「私」は、それでも、家のなかのようすを眼をこらして見ています。重い陶器の皿などがすべって落ちた音がして、主人は、だまって、そちらへ行って帰ってきて、もとの席にまたどしりと座ります。――「どうも女はぶたれたらしい。／音もさせずに撲ったのだな。」

以前は、「家長というものを頂点とする家族制度を非難している。」（中村稔『定本 宮澤賢治』1963 年）ともいわれた作品ですが、最近、これを一つの「演劇」と見る中村晋吾の論考を読みました（「賢治が目にした“ジェンダー・トラブル”」2026 年）。たしかに、語り手の「私」がひたすら見ているために、そこには「演劇」が生まれたのかもしれないのです。

中村は、そうした観点から、賢治が「封建文化形態」の「悪い面であるわざとらしさに堪えられない気がしたであろう。」とした恩田逸夫の「宮澤賢治『初期作品』孜」（1951 年）や、伊藤眞一郎が「見る／見られる存在」を軸に論じたこと（「宮澤賢治「家長制度」」1974 年）などの先行研究をあらためて引き出します。「家長制度」は、その家をおとずれた観客である「私」が見ることによって、「わざとらしさ」が演じられた、一つの劇だったのではないでしょうか。（馬車別当）

（本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション２　注文の多い料理店』によりました。）

****
《３》子どもの本の珠玉のことば　８２
****

　しかも、みんなが逃げたのは、つい今しがただとわかった。あわてて逃げたのだろう。果物の台がひっくりかえっていた。さっき、ライラ先生の家を教えてくれた少年のお父さんの店だ。その台から落ちたオレンジが、まだ道を転がっていた。真っ黒なアスファルトの上に金色の筋を描きながら、つぎつぎに転がっていく。

（『戦場のオレンジ』　エリザベス・レアード/作　石谷尚子/訳　東條琴枝/装画　評論社　2014 年 4 月　p.89-90）

1975 年に始まったレバノンの内戦を舞台に、南部から逃げてきた 10 歳のアイーシャ、７歳の弟と赤んぼうとおばあちゃんに起きたできごとを描いた作品です。お母さんは逃げる途中で爆撃にあい、お父さんは外国にいっています。アイーシャたちは、何家族もがひしめきあっている見捨てられた豪華なアパートを仮の住まいとし、耳の聞こえない同い年ぐらいの少女、サマルと親友

になります。サマルは、アイーシャの唇を読み、手話を教えてくれます。

そんな中、アイーシャのおばあちゃんが薬を切らしたために、寝込んでしまいます。アイーシャは意を決してアイーシャたちが敵視されている地域にあるライラ先生の家に薬をもらいにいくことにしました。おばあちゃんは、内戦の前、ライラ先生の家で働いていたのです。アイーシャはまず、兵士のいるチェックポイントへ行き、西ベイルートと、東ベイルートの間にある、グリーンラインと呼ばれる境界線にある分離帯へ飛び込み、また、別の兵士たちがいるチェックポイントでは耳の聞こえないふりをして難を逃れます。

そして、危険地帯を抜けて泣き出したアイーシャに、果物屋さんの少年がやってきて、オレンジをくれ、少年はライラ先生のところまでアイーシャを案内してくれます。アイーシャは薬を手に入れ、ライラ先生は国連の救急車を手配してアイーシャがアパートに戻れるようにしてくれます。引用は、アイーシャが救急車から見た風景です。どんな場所も一瞬にして戦場になり、命を落とす人たちがいる内戦の恐ろしさがひしひしと伝わってきます。

久し振りに読み直しましたが、今、起きている戦争について考えずにはいられませんでした。（Ｙ）

****
《４》 行って来ました！
****
市立伊丹ミュージアムで６月７日まで開催されている「チェコ絵本の父　ヨゼフ・ラダ展」に行ってきました。ヨゼフ・ラダ（Josef Lada 1887-1957）は、「チェコの国民的画家」と称され、日本では『黒ねこミケシュのぼうけん』（ヨゼフ・ラダ/文・絵 ラダ　小野田澄子/訳　岩波書店　1967 年 7 月）や、『きつねものがたり』（ヨゼフ・ラダ/作・絵 内田莉莎子/訳　福音館書店 1966 年 6 月）などの児童書で知られています。

ミュージアムのホームページによると、「日本初の大規模な回顧展」で、「児童本や、代表作『兵士シュヴェイクの冒険』の挿絵原画をはじめ、故郷の風景やクリスマスの情景などを描いた絵画、そしてラダの原点とも言える諷刺画の仕事について、ご遺族のコレクションを中心とする約 200 点を超える作品資料を通してご紹介します。」とあります。

全６章（第１章「子どもの頃の思い出」、第２章「絵画」、第３章「挿絵」、第４章「新聞雑誌とユーモア」、第５章「絵本」、第６章「創作物語」）で、ヨゼフ・ラダ作品の魅力をたっぷり味わうことができました。

第１章では、ラダの著書である『子どもの頃の思い出』や『私の人生の年代記』から引用された言葉が絵にそえられていて、ラダがいかに故郷の村を愛していたかが伝わります。チェコの四季の風景や、クリスマスなどのイベント、子どもの遊び、居酒屋の様子などがいきいきと描かれ、まるで、その場所にいるような気持ちになりました。特に、雪景色は静けさと暖かさを感じました。また、カワセミやシカやウサギやイヌなどの動物たちは、いきいきとして、絵から飛び出してきそうに感じました。絵の中には、チェコのカッパとも言われる水の精、ヴォドニークもいて、様式的な絵だからこそ、昔話の世界と自然につながっているのだと思いました。

ラダが生涯でたずさわった新聞雑誌は、およそ 85 種にのぼるとのことで、新聞や雑誌のユーモラスな絵も多数展示されていました。その中に、22 コマの横につながったカラー絵がありました。男性と犬が散歩中に家が倒壊してき

た事件を新聞記者が取材をして、新聞が印刷されて読者の手に渡るまでがユーモラスかつ、いきいきと描かれています。人や動物や車や機械がアニメーションのように動きだしそうに見えました。『黒ねこミケシュのぼうけん』や『きつねものがたり』のカラー原画もあり、再読してみたくなりました。（Ｋ）

市立伊丹ミュージアム　https://itami-im.jp/exhibitions/joseflada/

****
《５》　宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第２９回
****
第６章　鳥越信先生
その２　児童文学研究のデザイン（上）

1979（昭和 54）年 11 月、鳥越信先生（1929～2013 年）が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行きました。私は、１年浪人して入学した大学院の１年次で、24 歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

＜本編はこちらから＞
http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

****
《６》　富安陽子　腕だめし　ＳＴＯＲＹ　ＣＯＭＰＥ．２０２５
****
第２回「富安陽子　腕だめし　ＳＴＯＲＹ　ＣＯＭＰＥ．２０２５」結果発表！
◎ 第１位　「ワニくんのパンつくりきょうしつ」　星空久美子/作
　※ 富安陽子理事長の手描き表彰状を贈呈します。
◎ 第２位　「この電車はアフリカ行き」　あきらひろし/作
　≪講評≫
　http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe-2kekka.html
星空久美子さん、あきらひろしさん、おめでとうございます！

≪総評・第２回≫　　理事長　富安陽子
今回のキーワードは、ワニとパン。なかなか面白い言葉が揃ったな、と思って、さてみなさんはこのキーワードをどう料理してくれるかな？と愉しみにしていました。集まった作品はどれも個性的で、５作品に絞るのに苦労しました。最終的には、類似的な作品が重ならないよう、いろいろな味わいを持ったお話を選んだつもりです。どれも、よく書けていて面白かったのですが、全体的にまだまだキーワードに縛られている気がしました。“ワニがパンをつくる”“ワニがパンを食べる”というパターンから大きく脱け出せた作品が無かったのはちょっと残念。キーワードから物語を立ち上げるというよりは、自分の書きたい物語にキーワードを引き寄せるというチャレンジを！

ＩＩＣＬＯ　ＳＴＯＲＹ　ＣＯＭＰＥ（ストーリーコンペ）は、年２回。
次回のキーワードは５月 20 日（メルマガ NO.189）に発表します。
（１位、２位のおふたり、面白いワードをよろしく！）
応募締め切りは７月 31 日です。

物語づくりの上達の決め手は、とにかく、たゆまず、書き続けることです。
さあ！物語を書きましょう。
みなさんの、面白いお話を待っています！

＜富安理事長の参考作品はこちらから＞

「蔵守猫の話②」
http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe-2kekka.html#ref-2

＜詳細はこちらをご覧ください＞
http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe-2kekka.html

■――――――――――――――――――――――――――――――――――――■
【３】全国のイベント紹介
■――――――――――――――――――――――――――――――――――――■
●「トーベン・クールマン絵本原画展」
場所：神戸ファッション美術館（兵庫県神戸市）
会期：４月 11 日（土）～６月７日（日）10：00～18：00　※月曜休館、有料
主催：神戸ファッション美術館

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓
http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html
※イベント情報をお送りください。当財団ＨＰに掲載させていただきます／

■――――――――――――――――――――――――――――――――――――■
【４】プレゼント
■――――――――――――――――――――――――――――――――――――■
今号のコラム《１》「この本読んだ？」で紹介しました『ひとりぼっちのクジラとわたしの歌』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1) お名前　(2) 郵便番号・住所　(3) 電話番号　(4) メールアドレス、よろしければ　(5) このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。
応募フォーム⇒　https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A
締切は５月 11 日（月）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編｜集｜長｜の｜つ｜ぶ｜や｜き｜
神戸市長田区にある震災復興のシンボル「鉄人28号」が塗り替えられたと聞いて久しぶりに足を運びました。神戸出身の故・横山光輝さんの1956年の代表作。マンガはたちまちテレビアニメや映画などに取り込まれ、爆発的な人気となりました。再開発地区の商業施設やアーケードのある商店街には空きスペースが目立ちますが、鉄人28号を起爆剤としてエリアのさらなる活性化を願いました。（ＴＡ）
――――――――――――――――――――――――――――――――――――

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。
原則として返信はいたしませんのでご了承ください。
●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。
●配信の登録・解除・変更は、
　http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html
●このメールの送信アドレスは配信専用です。
●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 http://www.iiclo.or.jp/
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581　FAX：06-6744-0582　E-mail：office@iiclo.or.jp

――――――――――――――――――――――――――――――――――――